

# パネルディスカッション 「音楽批評と演奏家」

## ▼日程・会場

平成 22(2010)年 10 月 12 日(火) トッパンホール

## ▼パネリスト

カルラ・モレーニ(イタリア「イル・ソーレ・24 オーレ」紙)

マリー＝オード・ルー(フランス「ル・モンド」紙)

井上道義(指揮者)

松本良一(読売新聞社)

挨拶:西巻正史(東京都芸術文化評議会専門委員/トッパンホール 企画制作部長)

通訳:黒木弘子(モレーニ氏)、高橋美佐(ルー氏)

## ◆「海外批評家 in レジデンス」という活動

### 【西巻】

2007 年 3 月に、石原都知事の発案で東京都に芸術文化評議会が発足しました。そこでいろんな議論をした中で立ち上がってきた一つの事業が東京文化発信プロジェクトです。クラシックの音楽ジャンルに関しましては、ミュージック・ウィークス・イン・トーキョーというのを立ち上げました。その中で、東京というのは世界で最も合唱団の数が多いところだそうですが、その合唱の集積があるところでさらなる頂点を作っていくということで、スーパー・コーラス・トーキョーという 120 名の合唱団を立ち上げました。ガッピアーニという合唱指導のカリスマを 3 年間指導者に招きまして、彼がオーディションをし、既存のプロの合唱団からも選抜メンバーが加わって 120 名の合唱団が作られ、それを彼が 4 度にわたって期間中來日して、十数日のリハーサルをした結果、10 月 9 日からヴェルディのレクイエムの公演を開始しております。明日その最終公演がサントリーホールで行われます。

それからもうひとつ、音楽ジャンルで行われているのが海外批評家 in レジデンスです。これは日本でされていることを批評しているのが、日本語という限られた人しか読めない言語で行われているものなので、やはりその中では日本でされていることをもっと向こうの人がどう見、向こうの人に知らせてみたい、これだけアーティストが海外から日本に日常茶飯事に来ているのですから、向こうでそれが日常的に、あるいは恒常的に継続的に批評、東京で行われていることがレポートされるということこそ是非行ってみたいと思いました。またそれが翻訳されて批評されることによって、海外から日本に來た時も単に日本の既存の伝統芸能とか歌舞伎とかだけではなくて、東京に來て日本のクラシックシーンを見よう聞こうという風になってきたらもっと面白いのではないかと、というようなことを意図してこの企画を始めました。今年もそういう意味でイタリアとフランスから 2 人の優れた、そして権威のある批評家をお招きしております。今年は、海外批評家と演奏家、というタイトルで、このシンポジウムを行いたいと思います。批評というものが人々にどう読まれ、そして、同時に演奏家はどのような風で読んでいるのか、というようなことを、それぞれの国の状況を報告していただきながら、ディスカッションをしていきたいと思っております。

## ◆理想の批評とは

### 【カルラ・モレーニ】

イル・ソーレ・24 オーレと申しますイタリアの経済紙に週 1 回、音楽に関する批評、記事を書いております。イル・ソーレ・24 オーレというのは非常に部数も多く、よく読まれている新聞ではあるのですが、ただ日曜日は、市場、銀行、株式市場、すべて閉鎖されております。なのでどうしても日曜日の売り上げが落ち込んでしまっていました。20 年前にそれを打破しようということで、この経済紙と並行いたしまして日曜日に、文化欄をたくさん作った新聞を発行しようということになりました。これは非常に成功を収め、約 1 年ほど前から普通の日刊紙の中にも 1 ページほど割いて文化欄、文化のページが創設されることになりました。

### 【マリー＝オード・ルー】

私が現在音楽欄を担当しておりますフランスのル・モンドという新聞は、文化のことだけでなく社会、経済、すべての記事が掲載されている新聞です。大変残念なことを申し上げますけども、私がこの 10 年、ル・モンドに記事を書いていた間に、広告に割くスペースがどんどん増えていきまして、純粋に記事を書けるスペースは 30%ほど減少してしまいました。フランスではクラシック音楽を愛好する方はやはり減少傾向にありますので、同業者とこの状況をどうやったら良い方にむけられるのかという話をよくいたします。年寄り、年代物の音楽ファンだけでなく、もっと新しい世代を開拓しなければ、というのは恐らく共通の認識であろうと思います。

【カルラ・モレーニ】

昨日、素晴らしいコーラスを拝聴いたしました。ラテン語で歌われていたのですが、ラテン語は私たちイタリア人にとっても既に死語となつて今は使われていない言葉なのですが、それがコーラスの中では本当に生き生きと、今現在使われているような活力感に満ちた素晴らしいものを聞かせていただきました。

批評を書くときにはただ単にネガティブなことだけを書くのではなくて、未来に向かったポジティブな面も前面に出していかなければいけないと思っております。たとえば昨日のコーラスは非常に技術的にもプレパレーションがよくできていた、ヴェルディの精神というのも深くみとったコーラスだったと思います。このように本当に古い古代の言葉をしかもヴェルディの生きていた時代、1800年代の精神と共にそれを音楽にのせていくということ、それは非常に素晴らしいことだと思いました。

【マリー＝オード・ルー】

私の日本に対する第一印象は、まずホールが建築として本当に新しくきれいで素晴らしいということでした。その中の音響効果も大変よく考えられていて、聞きやすいというものであります。次に感じたことは、街で見かける皆さんが、大変真面目できちんとしていらっしゃる、日本は静かに周囲に耳を傾ける、という文化があるのだな、と思いました。そして実際にコンサート会場で良いコンサートだったにもかかわらず、観客の皆さんが落ち着いて静かでいらっしゃったんですね。これが礼儀正しさからくるものであり、そして本当にいいコンサートで興奮しているにもかかわらず、直接的に大きな感情表現をしないという、そういう国なんだな、と思いました。クオリティの高い文化創造をなさっているにもかかわらず、ひとつ弱点として気になるのは、自分の国でできあがった良いものを、外に向かって出すということに関してはまだまだあまりお得意でない印象を受けます。

【松本】

では今日の出席者の中で、演奏家代表というか、音楽家として普段から批評、聴衆に接していらっしゃる井上道義さんにまず、井上さんにとっての音楽批評というのはどういうものなのか。

【井上】

批評というのがこの国では大事に扱われていない。新聞で出てくる批評は1週間後が一番近いくらいで、時によっては2週間後ではないですか。それから書く人が、外注するというか下請するというか、もっと書いてもらうに値する人を、それぞれお願いしていますね。それ自体がすごく責任逃れなんです。批評があまり顧みられないのは、実は僕は、数が多すぎるからだと思います。もう批評している暇がない。数の多さの中に東京は吞まれている。だから本当をいうと、東京を見て日本を見たと思わない方がいいと思います。

【松本】

井上さんが理想とするような音楽批評というのは、どういうタイミングでどういうものですか。

【井上】

理想とする批評なんてあるのかな。例えば僕の若いころにそれこそスカラ座のコンクールで賞をもらった後に、またスカラ座のオーケストラを振ったりした時なんかにはちゃんと次の日に出て、まだ僕自身が熱いうちに何か言われる。それは僕に何かの影響を与えます。そういう影響がある、ということが批評の一番大事なことだと思うんですけど。日本に欠けているのは、批評が少ない、遅い、責任がない、ということだと思います。

【松本】

私の勤めている読売新聞の場合には、だいたい早くても3日から4日、遅い場合には2週間以上、批評の掲載までにあります。読売新聞は一般紙ですから、膨大なニュースを出すためにたくさんの人員をかかえています。で、新聞が出来上がるまでにはいろんなプロセスがある。それを考えると、演奏会があった翌日に新聞を出すというのは結構手間暇かかることなんです。

次にマリーさんに批評の速報性についてお伺いしたいと思います。

【マリー＝オード・ルー】

ル・モンドでは、一日3回のレイアウト会議というのをやりまして、その日の締め切りまでに何をどこへどう載せるかということ、真剣に討議いたします。本当に大変な喧嘩をします。インターネットで解決方法を探るということ、先ほど打ち合わせの時に、松本さんに申し上げたのですが、これは本当に最後の手段です。今現状、インターネット等でオンタイムにいろいろな情報が流れる状況に対して、こんな紙面争いで喧嘩をするというのは、例えば数時間でも失うのがばかばかしいような話なんですけれども、それをやって間に合わせています。

【井上】

やってほしいと思います。文化の、そこで今現在起こっているということを人の中に刻み込むという意識でもって批評家は書いてほしいんですけど、そこまでやっているのかな。

【松本】

日本の一般紙は多くの趣味や多くのものを読みたいという人がいて、その中で、クラシック音楽というジャンルに割けるスペースがどれくらいあるか、という問題があるんです。例えば週末にまとめて10ページ以上というようなことはできない。読売新聞は基本的に宅配新聞なんです。分厚い新聞だと重くて運べないんです。物理的な限界が決まっていると、例えばとてもうらやましいと思うのは、外国の新聞はブックレビューなんかものすごく超大なものが、週末になると載っていることが多いんですけど、日本は宅配を前提にする以上、難しいんです。

それから一般新聞の中でクラシック音楽の批評はという風に読まれているのかという、かなり根本的な問題があります。読者がどう記事を望んでいて、どう批評が読者の水準からして、難しくなく、楽しくおもしろく読んでもらえるのかということを見ると、それは時代ととも

に変わってきています。例えばクラシック音楽の記事に占める割合と言うのは相対的には低下してきていますし、音楽批評というのももっとも分かりやすく、という風に言われてきています。

【カルラ・モレーニ】

イル・ソーレ・24 オーレ紙は日曜版になりますと非常にボリュームがあります。日刊紙プラス文化紙ということになりますので、文化面の新聞だけで 24 から 26 ページ。倍の分量になります。でも時として、日曜日は大した経済欄がないので、それを置いて、文化紙だけを取っていかれる方も多いです。

【マリー＝オード・ルー】

ル・モンドは日刊紙面上には 2 ページ文化欄があります。フランスの場合は朝刊夕刊というのではなく、一日一回です。その 2 ページがしかし、美術と演劇とダンス、それからクラシックだけでなくポップスも含めた音楽、すべてを掲載しなければいけないという前提なので、決して多いページ数とはいえないと思いますが、日曜日は同じように、一般部分とカルチャー部分がくっついた形になります。非常に大きなイベントがあるときには、差し込みで 8 ページの付録が付き、そういう集中記事を書けるときは、私はとても幸せです。

先ほどマエストロがおっしゃったこと、私本当に賛成です。批評にはスピードが必要ですね。初めて聴衆に触れて、なるべくフレッシュなうちに批評をするというのが、原則だと私は思います。

【カルラ・モレーニ】

イル・ソーレ・24 オーレ紙は週に一度日曜版にしか文化欄がございません。ですから少し状況がちがうとは思いますが、読売新聞さんのように毎日の日刊紙の場合は、やはりなるべく早くスピード感を持って批評するというのが、大事な使命ではないでしょうか。

【松本】

今スピードの問題になっているのですが、これはもう一つ、スペースの問題とある程度関連してくるんですね。我々も非常に他の多くのジャンルと戦って、クラシック音楽のスペースをいかに獲得するかという不断の戦いを強いられています。その結果、月に 8 本から多いときには 10 本批評が載りますが、恐らく演奏会の本数としては日本の新聞で一番多いです、今現在は。言ってみれば、速報性のある程度犠牲にして週 1 回というジャンルを守る代わりに、週 2 本の批評を確保している。

【井上】

だから今聞いてると、フランスの新聞もミラノの新聞もだいたい日本の新聞とそんなに違わない。どうしてもやっぱり違うのは、東京は、コンサート、山盛り多すぎるから、だから批評がないように見える、という結果を、僕は感じる。

【松本】

私も批評の数が東京はものすごく多いというのは、この仕事について改めて、というか初めて感じました。これだけ毎日演奏会があっても読売新聞に 2 カ月で載る演奏会の評論数は 7 本か 8 本です。他の新聞だともっと少ない。となるとそれは確かにマーケットとしてはものすごく音楽の市場があつてたくさんの聴衆がいて、演奏会も開かれているんだけど、それに合うような形、質や量を維持した批評というものが提供できているかという、確かにそれは忸怩たるものがあります。それはある意味では新聞の構造的な問題かもしれないけれども、もっと言うと、日本の社会全体でクラシックの音楽文化、というものがどのくらいのウェイトを割くべきかという、暗黙の了解みたいなものがあつて、そこに縛られていると言えなくもないです。

【マリー＝オード・ルー】

皆さんが見たいと思っている量を上回ってもし文化的行事の数が増えてしまっているということであれば、なおのこと、批評家の役割というのは、違った重要性を帯びてきていいのではないかと思います。正にそこで、私どものような人間がそれを担当するべきなのではないでしょうか。今まで通りの考え方でいから、それはネガティブなことに見えているだけだろうと思います。

## ◆批評の基準とは

【松本】

今いただきたいいくつかの質問の中で多かったのは、批評の基準はどこにあるのですか、というような趣旨の質問でした。これというのは、批評家が個人的な印象を書いているだけで、本当に絶対的な基準というものが無いがゆえに、何か公平でないとお感じになっている方もどうもいらっしゃるようなので、そこら辺からまず井上さんに口火を切っていただきたいのですが、井上さんは日本の批評のそういう水準、あるいは内容明文についてどういうふうに思われていますか。

【井上】

東京はいま、東京の問題が日本の問題と思われていることが非常に強いのがおかしい。新聞というのは地方にもっと密着する時代なんじゃないかな、ととても思うのですが、批評がいいか悪いかということは、やっぱり、この人たちは批評を書いて食べられるだけのものを貰っているのかな。日本の批評家はもらっていないだよ、ちゃんとお金を。だからそのプロフェッショナルが育たないんだよ。批評するということは、ものすごくプロフェッショナルな、いろんな広い教養と細かい教養、知識というのを両方持ってないといけないじゃないですか。なかなかそういう人って、少ないですよ。それは、相当インテリジェントの高い人でないといけないし、それができる人というのは、できる人だから、お金たくさんもらいたいんだよ。違う？

【松本】

マリーさんはル・モンドの新聞記者、社員として契約して、新聞社の記者でもあり、かつ批評もやっていたら。だからもし、上司から言われて、クラシック音楽以外の記事も書いてくださいと言われたら、それは断ることができない。だけれども、そもそもル・モンドは、私をクラシック音楽の専門家として雇っているので、おそらくそんなことはさせないでしょう、というお話でした。

日本の新聞社の採用の仕方は、ジェネラリスト採用なんですね。スペシャリストを採用したがるということがあります。そこら辺はカルチャーの問題もあるんですけども、カルラさんにも、新聞社における自分の立ち位置と、音楽批評の関係を説明していただければ、と思います。

【カルラ・モレーニ】

私もマリーさんと同じようにフリーランスとして、要するに、契約社員として入っております。ですから私は、クラシック音楽の専門家ですので、それを批評しております。日本ではなかなか、批評家というものが食べていけないというなお話でしたけれども、私どもはやはりプロとして、それに見合う分のは払っていただいております。批評家として生活できていると思います。

イタリアにおいては批評はとても重要なものです。例えば、実際に劇場に足を運べない読者の皆さんが、一体今、どんなものが行われていて、どういう状況にあるかということを知りたがっています。そのうえで批評家が、それに対してどのような考えをもっているか、ということも知りたがっています。イタリアというのは非常に特殊なところで、まず第一の批評家というのは聴衆のみなさんなんですね。非常に厳しいブーイングを出したり、そういう批評をする観衆、パブリックがまず第一の批評家であると言えます。そういったお国柄ですので、批評は非常に大切な役割を果たしています。

【マリー＝オード・ルー】

私は毎月決まった給料をもらってル・モンド紙で仕事をしていますので、たとえ自分の書いたものがその月に、比較的多く紙面に載ったとか少なかったということとは関係なく、一定の給料をいただいております。現在、文化欄を担当している同僚が 20 人おり、それぞれが、自分が書いたものをできるだけ人に読んでもらいたい、という意味で、大変きつい競争の中で仕事をしております。そして、批評家が何かに頼った状態で、何かにおねった文章を書くという状況は、これには私は断固、反対でありますし、インディペンデントであるべきだと思っております。それぞれが自由に、自分の言いたいことを言い、そしてそれを受け止める側も、フラットに受け止めるべきでしょう、ということが、私の考え方です。

【井上】

日本のお客さんも、それ、できるはずなんですよ。そういうふうに、自分のどんどん拍手とか、拍手しないで帰るのか、途中で帰るのか、もっと立ち上がってブラボーを言うのか、はっきり言えるようにするのも、批評家が背中を押すか、それとも、それはおかしいんじゃないの、という役目をやって。それと同じで批評家も戦いを挑んでほしいと思うんですけど、そこまで戦っている批評家が、日本には少ないと僕は思う。それから戦うだけの相手が見えない、という状況が悔しいときと思うんですね。

## ◆時代の変化と共に

【松本】

悪い意味で、日本の音楽批評だけでなく、音楽市場全般に通じるものとして、オピニオンリーダ的なものを過度に背負っているようなところがちょっとあるのではないかと思います。つまり自分が、今ここで音楽を聞いたんだけど、それが本当に自分の耳が正しいのかどうか、というのは、専門家に聞いてみたい、というようなことを思う人が結構いて、それが必要以上に、音楽批評がなにか、権威的なものになっている一つの要因かなと思います。で、それはもとをただすと恐らく、日本の近代化の過程でクラシック音楽がむしろ教養の一環として入ってきて、これはまずありがたいものだからとにかく聞いて鑑賞しなさい、というところから始まって、そういう印象をクラシック音楽がちょっと引きずっているんだとしたら、それがやや、クラシック音楽の敷居の高さにつながるんだと思います。ただ最近は違うかもしれませんね。

クラシック音楽のシーンは変わってきているんですけど、依然として新聞あるいは音楽雑誌に載っている音楽批評の在り方があんまり変わっていない、というところに、どうもその層の背景があるような気がします。

もうひとつ逆の形から言うと、じゃあ批評は何のためにあるのか。アーティストの宣伝のためにあるのか、という問いかけを今いただいたんですけども、批評というのは音楽家のプロモーションとは全く無関係です。ただその中でも、演奏家の批評、音楽の批評というものがどこに基準があるのかという問題はあると思うんですね。それを受け止める人も時代とともに変わってきていると思います。例えば、カルラさんとかマリーさんはそういう聴衆の変化、それによって音楽批評の基準が変わってきているというようなことを感じることはありますか。

【カルラ・モレーニ】

私は個人的には、日本とイタリアの批評に関する違いはそれほど大きな違いはないと思っております。イタリアの聴衆、観衆は、先ほど、すごい批評家だと申し上げましたけれども、彼らも時として、自分の意見が本当に正しいかどうかということの確認をしたいという思いもあるようです。そういった形で、その批評家と一般の読者、それから観衆の人たちとのダイアローグが成り立っているということが重要なことではないかと思うのですが。

ただし日本とイタリアの違いといいますと、素晴らしい演奏家、歌手、そういった人たちを日本の皆さんが素晴らしい、イエス、と言ったとしてもイタリアでは多分イエス、でも、という言葉をつけ加えるかもしれません。

#### 【マリー＝オード・ルー】

フランスにおいては、人の言うことを鵜呑みにしないで自分の意見を持つという教育を子供の時からされますので、自分たちが大人になってやっていることが、そんなにこう何も遠慮しないでものを言っているというふうには思っていないわけです。それに対して日本の皆さんは、非常に他人の気持ちを気遣ったり、恥ずかしがり屋だったりするんだらうなと思います。そして大きな聴衆の側の変化としましては、インターネットがこれだけ生活に浸透してきますと、何でもありという時代になっていることを私も否定いたしません。ブログなどを読んでいますと、音楽のなんたるかという一番基本的な勉強をおろそかにしている人たちが、もうありとあらゆることを書いておりますが、これも一つの、大きな批評ですとか、ものの見の目というものが時代とともにどう変化していくか、という移り変わりの一つのパッセージとしては、やはり不可避のものであらうと思っております。

#### 【松本】

昔はなんか分からないけど有り難く読んでいた人が、今は自分でもっと意識が高まっていて、分からないことがあったらもっと分かるように書いてほしい、という部分があると思います。ただ一方で、インターネットのように今や誰でも、即座に書いてアップすることができる時代に、どうしても一日二日、甚だしいものになると一週間も二週間も後になって出る批評というものに、どんな意味を見出すのかということは、非常に難しい段階に差し掛かっているということが私の現場での率直な印象です。特に、クラシック音楽の需要の在り方の多様性が今大きく変わってきていると思います。今までみたいにマスマーケティングでお金が動き、聴衆を動員していくという今までの日本にあったやり方では、だんだんいけなくなって、百人いれば百人の趣味があって、そういう中でクラシック音楽のよさを伝えていかなくてはいけない、という時代になってくる。そういう時になると、新聞とかはある意味非常に図体が大きすぎて小回りが利かない部分もあつたりします。ただ一つ変わらないのはやはり音楽批評というジャンルがもし衰退しているのだとしたら、それは非常にゆゆしき問題だと思っています。例えば、記者さんが音楽批評を書かないんですかという質問の紙もあつたのですが、他のジャンルは記者が、読売新聞の場合、批評を書いています。だけど、クラシック音楽だけは、ほとんどの批評は外部の評論家に、寄稿という形をお願いしています。音楽をきちんと批評する耳をもった人間が内部には不足しているので、外の人をお願いせざるを得ない、ある意味ではそういう誠意の表れと考えると、本当は嬉しいところなんです。

音楽批評をやる人っていうのはオーケストラスコアを見た瞬間にそれが頭の中で音楽として鳴り響くくらいのレベルを持った人でないとやっていけないし、もしそうでないとしたら、それは全然違ったものになると思うんですね。本当はたくさん知識を持ってはいけません。となると、そういう非常に細分化して深くなっていて、聴衆も多くの情報に接して、例えば毎年の様に外国のオペラハウスのオペラを見に行く、なんていう人が日本でもたくさんいる時代に、今までの様な批評の在り方、クラシック音楽の記事の在り方、っていうのはやはりそれでは回っていかないと、思うんですね。で、井上さんにお伺いしたいのは、じゃあそういう状況の中で、例えば新聞なり雑誌なりという音楽記事にどういものが今欠けていて、どういものを欲しいと……。

#### 【井上】

地方にもオーケストラあるし、音楽会も随分あるわけだから、それぞれの場所でまず書くんじゃないの。で、そこから段々お互い成長するほかないんじゃないですか。批評家のやることは音楽という素晴らしいもののメッセンジャーとして、みんな、なるべく沢山来てくださいますと。それからある程度そこで、価値というものをしっかり判断できる、自分というのをずっと育てるという使命があるわけじゃないですか。でもそれがこう、ちゃんとそれをやったことによって、収入なり名誉なりがしっかりそこで認めるっていうレコグニションをちゃんとされていないからいけないわけで、それをこうするのはやはり新聞社の、もしくは、それを買っている読者の声、新聞社の社主なら社主のやるべきことなんじゃないですかね。それをやったり、やってないんじゃないですか。

#### 【マリー＝オード・ルー】

私は井上先生のご意見に、本当に心から賛同いたします。どんな記事で誰が書いたものであっても、それを読んだ人が、自分もこのコンサートを聞いてみたい、という気持ちを最後に起こさなかったら、自分がそのコンサートなり CD など聞いて、どんな喜びを持ったか、ということが余すところなく伝えられなかったら、書く意味がありません。自分がトータルに見たものを、きちんと喜びとして伝えて、どんな人にもそれを伝えることができ、むしろ自分が勉強した音楽知識などはひけらかすことなしに、完全なコミュニケーションがとれるということが理想です。

#### 【カルラ・モレーニ】

私も同じ意見を持っています。ギリシャ語のパス、パッションというものが、私ども批評家にとって、または批評というもののあるべき姿にとって、非常に大切な言葉だと思います。様々な知識それから文化的な背景、こういったものももちろん必要ですが、私は批評するにあたって最も基本的な、ベースとなるもの、それはやはりパッション、情熱だと思います。

#### 【松本】

批評というのは芸術というものに何らかの私は価値判断だと思っているので、そういうものを、そのコンサートにいなかった人にも届けるという意味で、絶対に必要なものだと思うので、批評を守っていかなくてはいけない。ただ一方で、読売新聞に音楽批評を書いていただいている音楽家の方は、非常に水準の高い方ですし、そこには何の間違ひもないし、全く自信を持ってそれを紙面に掲載するためのお手伝いを、私はしているわけですが、一方で、それが難しすぎると言われたり、あるいは逆に、分かりやすすぎて何かどこか偏ってないか、とかいろいろなことを言われる背景には、クラシック音楽を聞く人の数が増えてると思うんですね。そういう新しい聴衆、新しいクラシック音楽の需要のスタ

イルというものと音楽批評とを、どうやって関係を強化して結び付けていくか。ひょっとしたら今までとは全然違うスタイルの批評が必要なのかもしれません。

【井上】

僕が十代の頃っていうのはやっぱりクラシック聞く人っていうのはちょっと異端的なイメージがまだまだあったと思うんだけど、今、松本さんがおっしゃるように、クラシック音楽は、もう、はっきり言って僕たちの音楽なんです。輸入品じゃないの、もう。洋服みたいなもの。普通なことになってきているわけだから、それを日常的なものとして、音楽だけとの関わりで批評してほしくない時代に入っていると思う。だから新聞社なんかは、もっといろいろ批評できる人を雇っていろいろやったらいいと思うんだけどね。

【マリー＝オード・ルー】

クラシック音楽というものがなにかとても特別なもの、というふうに思い続けてしまうと、それはやはり、現状に即した考え方ではないだろうと思います。音楽マーケットがスーパーマーケットの商品のようにたくさん並んでいるという状況になりまして、ではそのようにして開拓された、数的には増えているはずのクラシックの聴衆の皆さんというのが、きちんとしたコンサートに行きますか？という問いかけをすると、いえ別に行きません、という答えが返ってきたりするわけです。ですから、すそ野が広がってきているからといって、いわゆる旧来の、まあここでいいます非常に質の高い、スーパーマーケット的商品ではないものが生き延びる道というのは、まさに暗中模索で、大変難しい状況になっているんだろうな、と思うわけですが。ただ聴衆が減っているというふうには思いませんし、実際、減っていないと思います。

【カルラ・モレーニ】

音楽批評、特にクラシック音楽の批評というものは、イタリアで言いますと、スポーツ関係、映画関係の評論に比べると、とてもマイナーなものです。どうしてもスポーツの評論あるいは映画の評論と同じような大衆性を持つ、ということは、これは少し難しいものがあると個人的には考えています。ただしそのマイナーなものこそ、やはり過去、その歴史の中で重要な位置を占めてきた、重要なものを作り上げてきたという歴史もあります。ですからこういったマイナーなものを、発する、発信する権利というものをよく見つめて、その質的なもの、高いものを発信していくということが、私たちにとっては重要なのではないかとこのように考えています。

【松本】

やはりもっと広い視野から、音楽の批評というものを、増え続ける聴衆、だけど多様化していろいろなハイレベルなものにも対応しなくちゃいけない。芸術を守らなくてはいけないけど、一方でそういう多くの人にリーチするようなやり方を考えなくてはいけない、ということで、日本の新聞なんか非常に大きな、制度的にも、あるいはシステム全体の転換点にありますし、今の様なかたちで、新聞がいつまで続くか、というのは、まあ分からない部分もあるし、そうなった時には、貴重な音楽批評のスペースを提供していたこのメディアがどうなっていくのか、ということも非常に大きな問題があると思うのですが。なるべく多くの人に受け入れられるような、しかし、質を落とさないようなかたちで、きめ細かく対応できるように、どういう在り方があるのかというのをもう一度自分でも考えてみたいと思います。

【井上】

やっぱり、批評で一番大事なものは、フレッシュさ、だと思いませんか。音楽というのは時間とともに動くアートなので、批評家もその時間芸術と一緒に動いてほしいと思います。これだけ大きいマーケットの中で、批評家はもっともっとたくさん出てきてほしい。それには、それに対する対価を払うシステムを早いところ見つけなきゃいけないから、それは音楽家の方も協力するから、何とかせんとお互いのためにならないから、と、とても思います。

【カルラ・モレーニ】

今まで私どものこういう話を静かに聞いてくださった皆さん、そして皆さんからの質問の多さに、私は本当に驚くとともに、それによってここ日本、ひいては東京の音楽的なカルチャー、文化度の高さ、というものを痛感いたしました。これはヨーロッパひいては世界にも匹敵するものだと思います。

【マリー＝オード・ルー】

批評家もそして皆さんも、なんだこれは、と思った時には即座に横っ面をひっぱたく、という姿勢で仕事に臨み、また、音楽の現場に参加していただきたいな、と思いました。私のもたらず情報が、できるだけ私の本国でも意味をなして流通するように、頑張っていきたいと思います。

【松本】

どうもありがとうございました。いろいろ質問いただいていて、全部にお答えできませんでしたが、もし何かあれば、是非なんなりと終わった後でも思いつきいただければ、お答えできる範囲でお話をさせていただければと思います。